

新新はの  
大  
目録

H・カ・工

人は何故万年筆を買うのか、という問いを立てての第三回目。

今回は内面の記号消費というところで話が終わった。では、内面の記号消費とは何かという問題である。内面の記号消費とは、いわゆるギリシャ哲学で言うところの「イデア」の概念に近いのではあるまいか。

イデアとはアイドルとかイデオロギーなどの言葉に通じるものである。簡単に言えば「理想」である。理想は現実ではない。ここではないどこかである。人間の世界ではない神の世界である。

例えば、現実には完全な円を描くことは出来ない。どんなに精密に描いても、ミクロの単位では必ずどこか歪んでいる。しかし、我々は完全な円の概念を持っている。現実界には存在しないものの存在を知っているのである。イデア界に真実の円が存在しているからだ。我々はイデア界に住んでいたのだが、現実界に来るときに多くの記憶を失って来てしまった。

ゆえに、我々は善を知っていても、完全に善になり得ない。正を知っていても、完全な正を行えない。美を知っていても、完全な美を再現できない。ただ、イデア界の思い出が、我々に善や正や美の感覚を与えている。

つまり、万年筆はイデア界において存在する重要な「何ものか」なのである。そうでなければ、あんなインクが垂れて、持ち運びに気を遣い、すぐにインクが切れてしまう、きわめて不都合な筆記具を愛でる理由が分からない。

分からないものを分からないからという理由で不必要なものとするのは現代人の悪い癖だ。この世には分からないものがほとんどではないか。まず、生きてる意味が分からない。この世が存在する意味が分からない。意味が分からなくても重要なものなどは山ほどある。

万年筆は本当に意味が分からないが、万年筆に喜びを感じるのは真実である。イデアは決して実現しないとプラトンは説いた。しかし、真実を思い、真実に生きるのは決して間違ったことではないと思う。どれだけ「またそんなものに無駄なお金を使って！」と身内から罵られようとも、それは批判に当たらないことが分かる。ちっとも無駄ではないのだ。真実に対価を支払っているのだから。

ゴールデンウィークをだらだら過ごして気がつけばもう土曜日だ。木曜更新はどうなったのだという感じである。まったく曜日感覚が消え失せた。気がつけば明日で休みは終わりという……。なんてこったい。前回の続き。

記号消費とは、言ってしまうえば信仰心である。実用性の領域を超えて、価値の世界を消費するのである。価値の世界は自分の価値の世界、世間の価値の世界がある。万年筆やペンは世間の価値の世界でもあり、また自身の価値の世界でもあり得る。しかし、株式などはまさしく世間の価値の世界である。100円の株は100円の価値でしか無く、しかも、株式そのものの価値ではない。世間で通用する金銭の価値である。

この点はモンブランと違うところだ。世界中の人間が消えようとも、僕はモンブランを筆記具として使うだろう。もちろん、モンブランを使っているというちょっとした優越感を感じないわけではない。が、それはモンブランを使うごく一部に過ぎない。

これは、信仰心に似ていないではないだろうか。信仰心とは他者からの認知を期待してのものではない。自身の思念から生まれるものでなければいけない。僕はいかなる宗教にも皈依していないが、自分の道徳律や美学なるものを可能な限り追求したいと思っている。道徳律や美学、また信仰心とは、世間から認められたり、それにより利益を得たりする為のものではなく、この場合の世間とは自然現象とイコールである。ある自然現象に対し、いかに生きるかの道徳律であり美学である。

この理論を演繹すると、マスメディア時代の記号消費の動機「ペに乗っている私」「モンブランを使っている私」「道徳律を実行している私」という他者的な視座は消え、内面的な記号消費を行っていることになる。

佐々木俊尚のキュレーションの時代を読んだ。その中に、「マスメディアの衰退とともに『記号消費』は消滅していき、21世紀は『機能消費』と『つながり消費』に二分される」とあった。

まず、『機能消費』とは、文字を書かなければいけないからペンを買う、とか、移動に必要なだから車を買う、とかのたぐいである。必要であるから消費する、それがなければ困るので消費するという意味である。

『記号消費』は機能消費とは対照的で、言ってしまえば、必要のないものを消費するという意味である。例えば、モンブランの万年筆だとか、ベンツだとかがそれ。文字を書くだけなら数百円のペンで充分である。ホワイトスターが付いている必要はないのである。ビンテージ万年筆などは、ボタ落ちはするはペン先は乾くは、使いにくいことこの上ない。日本の道路は最高時速100キロだ。300キロでるフェラーリなど不必要であるばかりか、道路事情の悪い日本では不便ですらある。にもかかわらず、人々は不便なものにより高い金を支払う。そういうものをとりあえず「記号」と呼んでいる。従来記号消費の意味の大部分は、「モンブランを使っている私」「ベンツに乗っている私」を表現できたからだという。しかし、マスメディアが衰退してくると、ベンツの評価やモンブランの価値というものに、世間の共通の認識がなくなってしまう。すると、モンブランを使っている私という記号が世間に通用しなくなってしまう。そのような意味で、記号消費の時代はおわり、機能消費へ戻るのではないかとされている。

機能消費ともう一つの可能性で出てきたのが『つながり消費』である。だが、つながり消費は記号消費の一形態でしかあるまい。従来記号消費が不特定多数に対してのものであるならば、つながり消費は特定のもの、あるいは自己完結的なものである。しかし、仲間的な消費、自己完結的な消費は今に始まったことではない。

消費といわず、「もの」というものを三つに分けられるのではないか。

- ①自己完結的なもの 「記号消費」「つながり消費」
- ②他者から認知が与えられるもの 「記号消費」
- ③実用的なもの 「機能消費」

この分別は物に限らず、学問や信仰にも当てはまるのではあるないか。。

さて、モンブランは明らかに①と②の領域である。ある程度身分がある人間ならともかく、僕のようなチンピラがどれだけホワイトスターが輝くような書き方をしたところで、それが分かる友人など皆無なのである。さりげなく目立つように使っていると、「なにそれ？ 万年筆？」と聞

いてくれる友人はいるものの、試しに書かせてみると、「書きにくい」の一言である。

マルクスは資本論の中で物神という概念を使う。例えば、株式などが例で、実態もないのにその価格は常に上下して、人々は実態のない価格に踊らされている。それは、あたかも偶像崇拜に似ているという。偶像も人々が自分で作り上げ、自分で拝んでいる。もちろん、偶像のうしろには価値観の元になる神やら何やらが付随している。概念の発露として偶像が存在する。偶像は②の他者から与えられる認知による価値が多い。「マリア像を拝んでいる私」なども有りである。しかし、母の形見、などというものは、完全に①の生活を持つ。

以上のような前提から、人はなにゆえに万年筆を買うのか検討したいのだが、まだ検討していないので、それは次回にしようと思う。

ツイッターを始めた。ツイッターでインクや細々した文具などをUPしてます。よかったらのぞいてみてください。

<http://twitter.com/hkazuyukiz>

インク退色テスト。窓に貼り付けて半年

2階のベランダの窓に貼り付けてついに半年経った。インクの退色具合の追加報告。

退色テスト1ヶ月時点の退色報告はこちら。写真有り。

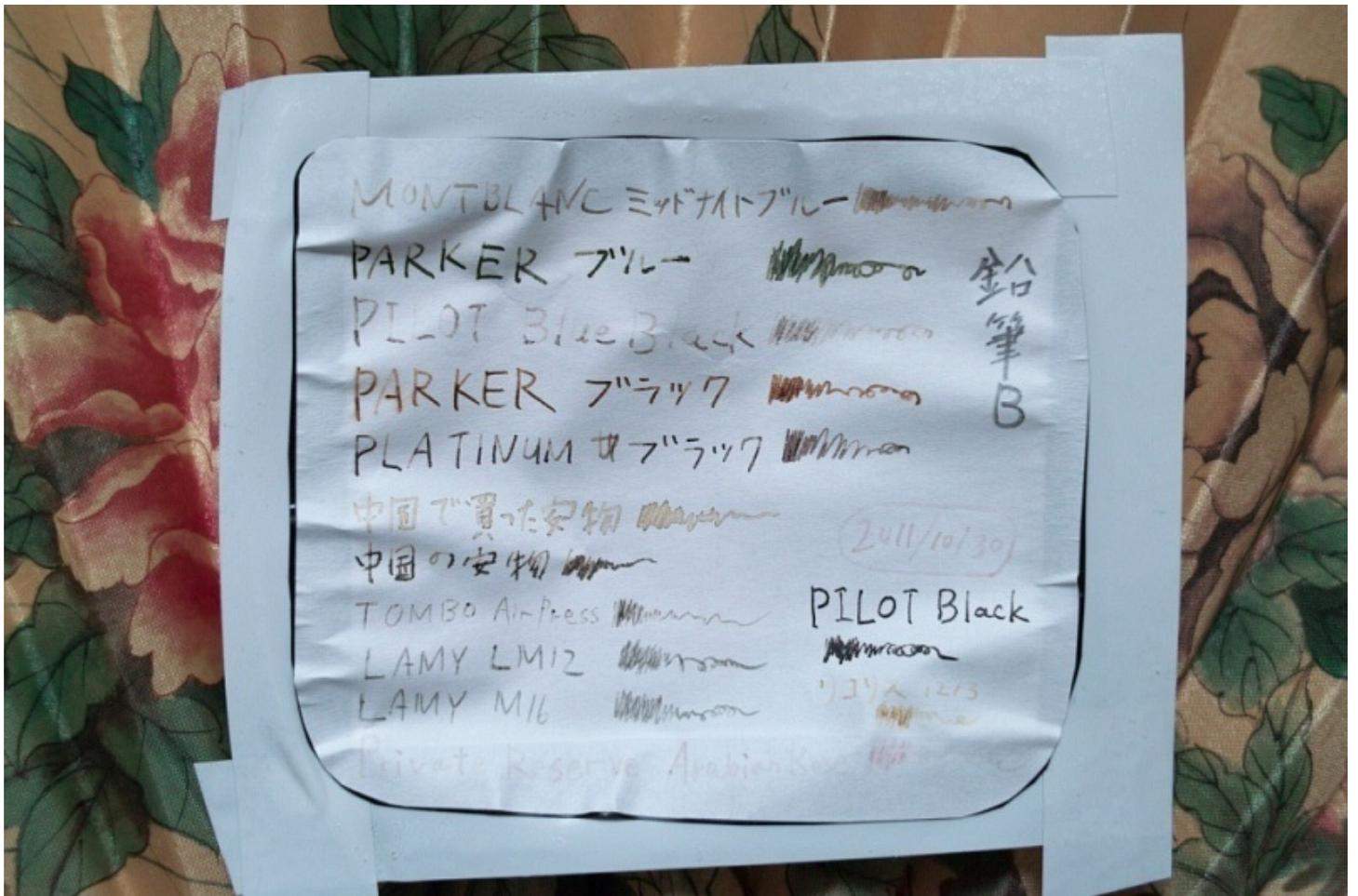
<http://ameblo.jp/h-kazuyuki/entry-11101402388.html>

3ヶ月時点の退色報告

<http://ameblo.jp/h-kazuyuki/entry-11153329556.html>

まずは上記のリンクの写真と比べてみて欲しい。

今回のものは4月19日撮影。大体半年だ。



紙はMIDORIの北国シロクマノート。紙はほとんど焼けていない。

以下は個人的感想。

■モンブラン ミッドナイトブルー

青みは完全になくなった。前回よりも薄くなった。

#### ■パーカー ブルー

これはブルーブラックの間違いか？ 緑色に変色したブルーブラックであるが、今回は緑が退色し始めた。

#### ■パイロット ブルーブラック

こちらも、青みが消えた。相当薄くなってきている。上の方など判読できない。

#### ■パーカー ブラック

茶色に変色した。茶色の色が抜けてきた。

#### ■プラチナ ブラック

薄くはなっているがなかなか健闘している。茶色が出てきた。

#### ■中国で買った安物M

1ヶ月時点での変化がもっとも大きかった。しかし、3ヶ月前と比べると、さほど変色している印象はない。判読も可能。

#### ■中国で買った安物F

意外にはっきりと色が残っている。

#### ■トンボ エアプレス

1ヶ月時点ではほとんど退色のなかったボールペンであるが、半年経つと確実に退色が見られる。

#### ■ラミーLM12&LM16

トンボよりもさらに退色が見られる、と3ヶ月時点で書いたが、現在ではならんできた。

#### ■プライベートリザーブ アラビアンローズ

今回の実験で最も薄くなった。もう少しで消えてなくなる。

#### ■パイロット ブラック

ほとんど退色なし。これはボールペンだったか？

#### ■ルビナート リコリス

12月3日時点で追加した。こちらも相当薄くなっている。

#### ■鉛筆

退色なし。すごいで鉛筆。

#### 総評

ブルーブラックは長期保存に向き、公文章に向いていると言うが、モンブランとパイロットは相当薄くなった。パイロットのブルーブラックは光に弱い。ブラックの方が退色しない気がするが。

あと感心していることは、このノートの紙だ。高いだけのことはある。燃れてきているのは紙ではなく回りのテープだろう。

ツイッターを始めた。ツイッターでインクや細々した文具などをUPしてます。よかったらのぞいてみてください。

<http://twitter.com/hkazuyukiz>

## シェーファー デルタ・グリップ

---

パプーの使いにくい点は、写真を貼りにくい点。

画像はファイルが大きくなるので、どうしてもDLにはむかない。

この点が上手い具合に改良されれば、もっとパプーは人気が出るような気がする。

と言うわけで、画像付きはブログで。

<http://ameblo.jp/h-kazuyuki/entry-11220830817.html>

## シェーファー デルタ・グリップ

SHEAFFER DELTA GRIP BLACK

見た目に惚れて買った。と言ってもネット上の写真がキレイで、ネットで買った。値段も1000円と安い。しかし、届いた実物はなるほど、1000円なるかな、という感じ。僕が撮った写真は1000円以上に写っているであろうか。ちなみに、クリップ部分は一件金属っぽいプラスチックである。

書き味はスチールニブなのでしなりはないが非常になめらか。大満足である。むしろ、愛用してしまう。ペンぱれーどさんのブログによると、ペン芯が高級ラインと同じものらしい。それ故に素晴らしい書き味だとか。ペン芯はこんな感じ。

一つだけ気に入らない点は、首軸を外したとき、カートリッジが軸に残る。インクの残量が分からないし、この前はインクが飛び散った。困ったものである。

書くとこんな感じ。フローは良く、濃さも均一。インクは付属のカートリッジブラック。紙はロディア。

## 赤西仁を全力で擁護して思ったこと。社会的再生産・戦前戦後の価値観について

---

赤西仁を全力で擁護して思ったこと。社会的再生産・戦前戦後の価値観について

前のページでジャニーズの赤西仁という人が事務所も知らない電撃デキ婚をして事務所から制裁を加えられる事件があった。事務所の制裁は行き過ぎである、と赤西を擁護した。

その中で、社会的再生産を含む憲法に社会的再生産の最重要条件である出産・子育ての義務がないのはおかしい先週以下のように書いた。

「憲法、社会契約には社会の再生産が意図されている。最も重要な社会的再生産である出産子育てを入れなければ総合性がとれない。仮に、「出産は自由」にしてしまい、皆が皆、子どもを「作らない」ことを選択したならば、たちどころに国家と社会は消滅してしまう。納税するしないを自由とするよりもなおたちが悪い」

ふと思ったのは、確かに憲法には書かれてはおらぬが、戦前には「産めよ増やせよ」というスローガンがあった。聖書でも神が「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」と言っている。戦前の価値観と戦後の価値観が変わったことは周知のことである。「産めよ増やせよ」の戦後的対義語は「明るい家族計画」である。

戦前と戦後で変わったことは他にもある。

戦前＝欲しがりません勝までは

戦後＝借金しても欲しがれ

戦前＝贅沢は敵だ

戦後＝消費は美德

いまの資本主義体制の中では、人生・生きるとは、「いかに稼ぎ、いかに使うか」である。その中では、子供もまた商品と化す。もちろん、直接子供を売り買いするという話しではない。子供も、車や服や趣味への出費と同じ消費の対象物となる。

友人でも「子供も欲しいが旅行もしたい」とか「結婚すると趣味の時間がとれなくなるから嫌だ」とか「子供は金がかかるからいらぬ」という奴は多い。出産・子育てが「スキューバダイビングをやりたい」とか「新車が欲しい」とかと同列で語られている。

前にも書いた。「皆が皆、子をなさぬことを選択すれば、たちどころに国家社会は消滅してし

まう。視点を大きくすれば、人類が消滅してしまう。ゆえに、善なる社会の再生産を目指し、自発的に出産・子育てを行うことは美德にあたる。これを憲法の義務に加えるべきである」と。

納税が義務であるのも、社会の再生産の為である。納税も嫌々納めるのではなく、社会をより善くするために自発的に納税することが美德にあたる。本来は納税者がそう思って納税できる社会・政治が望ましい。残念ながら現実はそうではない。だから、アメリカでは寄付減税があり、日本をはじめ諸外国でも民営化の議論がある。寄付はもちろん美德であるが、その目的が売名や節税の為であると、美德は差し引かれることになる。

2010年の我が国の出生率は1.39。では、日本人が社会的再生産を目指し、出産・子育てをしないのは日本人に徳がないからかといえ、そうはいえない気がする。戦前と戦後の価値観を対比して思うのは、戦前はナショナリズムであり、戦後はインターナショナリズム・グローバリズムという価値観の相違があるということだ。分かりやすくいえば、戦前＝ナショナリズムは国の存在、共同体の存在、人類の栄光を信じると言うこと。戦後＝インターナショナリズム・グローバリズム・ポストモダンというのは、上記のものを信じないということ。

思想的には戦前はモダン。戦後はポストモダン。戦後日本は世界初のポストモダンの実現国とされている。モダンというのは人間主義の考え方だ。いかに人類が素晴らしいか、いかに国家は優れているか、それを競い加速させる思想だ。一方、ポストモダンは二度の世界大戦という大量殺し合いを経て、「本当に人類ってすごいのか？ 本当はアホでなかろうか？ 人類が連む国家とは悪であり殺し合いの元凶ではなかろうか」という懐疑から出発する。つまり、思想的には善なる社会的再生産が、必ずしも善ではないのである。国家社会の再生産に二の足を踏む思想である。

以上が出生率が1.39でも徳がないわけではない思想的な背景である。思想的ほど明示的ではないにしろ、心情的にも社会の再生産を全面肯定できなくさせているのがグローバリズムである。即ち、日本で人口が増えなくても世界では人口が増えている事実である。地球規模で考えれば、人口増加こそ問題であり、人口増加という問題に荷担することは正しいことではない、という心情である。正しいことではないとまでいわなくとも、自ら人口を増加させる必要はない、という心情である。これがナショナリズム下の現象であれば、「他国が増えているのであれば、我が国はもっと増やせ」となるはずである。

さらに、日本の現状で言えば、本来善なるものである社会の再生産のための出産・子育てであるはずなのに、政府の言うことは「老人を支える人口が足りない」とか、経団連のとても偉い利殖家達などは「消費人口が足りない」「労働人口が足りない」などと言い、挙げ句の果てに、「少子化が進むなら移民を入れる」と言う。このような中で国民の出産・子育てに対する美德を涵養することなど至難の業である。

上記のような思想的、心情的な環境下にあるジャニーズ事務所にしてみれば、赤西に行動は許されざることであり、と結論を出すのも宜なるかなである。しかし、猫ひろしがカンボジアで揉めている件を見ても分かる通り、ナショナリズムを幻想であると切り捨てるのは難しい。インターナショナリズム・グローバリズム・ポストモダンというのはそれ自体では価値観にならない。日本でポストモダンが実現したのは、戦前という強烈なアンチテーゼがあったからであり、ポストモダンはポストモダンだけでは存在し得ない。赤西仁の件をきっかけに、社会的再生産が美德にあたる善なる国家社会とは何かを考えたいのである。

ツイッターを始めた。ツイッターでインクや細々した文具などをUPしてます。よかったらのぞいてみてください。

<http://twitter.com/hkazuyukiz>



国家社会は人に先立つもの、もしくは、人と不可分のものと考えるのであれば、社会を維持存続させるために、人口の再生産は不可欠である。社会契約の親分の憲法には納税・勤労・教育の義務がある。これらは、社会を存続するために設けられた義務だ。ここに出産子育ての義務がないのは、子どもは作るものにあらずして出来るものであるという前現代的な思想ゆえと思われる。

「出来る」ものではなく「作る」ものであるという認識が一般化するならば、出産子育ての義務を入れなければ話がおかしい。憲法、社会契約には社会の再生産が意図されている。最も重要な社会的再生産である出産子育てを入れなければ総合性がとれない。仮に、「出産は自由」にしてしまい、皆が皆、子どもを「作らない」ことを選択したならば、たちどころに国家と社会は消滅してしまう。納税するしないを自由とするよりもなおたちが悪い。故に、子をなし、これを育てるとするのは国家社会に対する貢献である。

しかし、我々は人間である。自然にまかせて増えるだけでは獣である。ただ産み増やすよりもさらに徳高く賞賛に値することがある。それは、子をなして育てているという行為を動物的本能を超え、善である国家社会の再生産を目的として自発的に行うという意志である。例えば子どもが作れなくともこの精神を有する限り徳があるといえる。

赤西擁護論にもどる。上記のように考えれば、事後報告とした理由も理解しやすいのではなかろうか。ことを公にする前に事務所に報告したのでは、あのような制裁を科す事務所である、何を命ぜられるかわかったものではない。事務所やスポンサー側に衝撃を与えたのは事実であろう。しかし、己の保身に走らず、社会的再生産を優先した彼らの行動は緊急避難にあたるのではないだろうか。以上のように考えれば、斯様なペナルティーと知事の言説がまかり通ることは、社会的な悪影響が大きいと言わざるを得ない。

ツイッターを始めた。ツイッターでインクや細々した文具などをUPしてます。よかったらのぞいてみてください。

<http://twitter.com/hkazuyukiz>

更新は木曜が金曜どころか土曜になってしまった。今前に書いた小説を直している。四章だが、一章はまるまる変えようと思っている。タイトルは「冥土屋」とつけて何カ所か投稿したことがある。当時はメイドが流行っていて、その流行に乗っかろうとしてつけたタイトルである。だが、すでにメイドは凋落気味である。よってタイトルは「冥府屋」にしようと思う。以下のような内容の小説である。

己の死というものは、己が生きている限り分かるものではなさそうで、では、己の死を以て己の死が分かるのかといえ、これもおそらく分からぬものでありそうだ。ならば、生と死の違いは何かと問わば、その違いは決定的であるにもかかわらず、よく分からないという何とも頼りない答えにしかならない。

己の結婚や、己の子どもというものは、やはりこれを経験するまでは想像のものでしかないが、経験してしまえば現実としてそれなりに分かるものである。しかし、死はそうはいかない。また、結婚や子どもは、するまい、もつまい、と経験せざるを選択することが可能であるが、死はそうはいかない。未だ死を免れたものはいない。とすると、死とは、死にたくないのだが、致し方なく死ぬものや、と思えど、この国では毎年三万人自殺者がいる、中には織田信長のように、捕まると殺されるのでそれならば自刃せむ、という人も居るかも知れないが、三万人皆がそうとは考えにくい。おそらく、生きようと思えば生きられるにもかかわらず、敢えて死んだ人も多からう。

死と生を対比すると、生の意味というのは分からない。そうではなく、生を絶対視すれば、生とは相当なほどに明瞭且つ自明なものである。そう考えると、自殺とは死を選ぶというよりも、生に見切りをつける、生を捨てると考えた方がしっくりする。何ものか分からぬ死を選ぶというのは不合理である。なんだか分からないものは選びようがない。

だが、ひょっとすると、彼らは死を見つけたのかも知れない。死を理解し、死を望み、そして、死を選んだのかも知れない。はた目にはそう写らなくても、彼らは死を知っていたのかも知れない。

ツイッターを始めた。ツイッターでインクや細々した文具などをUPしてます。よかったらのぞいてみてください。

<http://twitter.com/hkazuyukiz>

丸善で行われている世界の万年筆展に行ってきた。丸善はいつも賑わっているが、この日ほど混んでいるのは初めてだ。ガラスケースには珍しい万年筆が並び、人々が覗き込み、また店員も増員されているのか、色々と話し込んでいる。丸善の地下が小さな祭り会場となっていた。

特に新品万年筆を買う予定はないので、ペนครリニックでダイアログのインクがとぎれる現象を改善してもらおうと思っていった。12時頃に行ったら昼休みということで、予約の紙を渡られ、1時30分ごろ来てくれといわれた。その間、丸善内で立ち読みをしたり、カリグラフィー展をみたりして楽しんだ。本屋は好きなので1時間半くらいは優につぶせる。

1時半に行くとなすでにクリニックは始まっていて、調整をしていた。ペン先の調整とはどうやるのかと思ったら、紙ヤスリの上に筆記するようにペンを走らせるのだ。色々ヤスリを買ってそれを繰り返す。

僕も調整してもらった。しかし、ペン先の問題ではなく、毛細管現象が働いていないとのこと。スリットの間に小刀のようなものを入れて開いていた。「しばらく使って様子を見て、と言われた」残念ながら改善はされなかった。まあ、コンバーターを捻ればインクが出てくるのでいいか。あと、パーカーのペンマンを入れたのが悪かったかな。やはり純正を使うべきか。

限定インクの日本橋あかねを買った。ちなみに、過去の万年筆展で売りに出されていた限定インクも売られている。買いそびれた人は良いかも。自分はこの色が欲しいと言うよりは、今日、この場所にきた記念に購入。意外と色の濃い赤なので使い道があるかも知れない。落ち着いた色だ。写真のティッシュはペン先を拭いたものであるが、まるで鼻○である。

3階では万年筆画展とカリグラフィー展をやっていた。カリグラフィー展は必見である。西洋書道侮るなかれ、なんて書いてあるかは読めねど、純粹に美しい。書画同一は東洋のみにあらずなり。

ツイッターを始めた。ツイッターでインクや細々した文具などをUPしてます。よかったらのぞいてみてください。

<http://twitter.com/hkazuyukiz>

## ツイッターを始めて**50日**でフォロワー数**4000人**突破！

---

ブログやATBooksなどの関連サイトのアクセスが伸びればいいな、と思って50日前からツイッターを始めた。虚空に向かって呟いても仕方がないので、まずはフォロワーを増やそうと興味あるワードを検索して出てきた方々をフォロー。その中の何人かが、興味を持ってくれたか義理か、フォローを返してくれた。また、何人かとは会話もしているので有意義なツイッターライフをおくれている。

しかし、ツイッターは2000人以上のフォローは

フォロワー数 $\times 1.1$

というルールがあるので、1818人以上のフォロワーがいないと2000人以上フォローできない。

そこで役に立つのが相互フォローのアカウントだ。僕が50日でフォロワーを4000人にしたというと、友達に驚くが、別に大変なことなど何もないのである。相互フォロー専用のアカウントというのは、そのアカウントをフォローした人をフォローするとフォローを返してくれるという仕組み。こちらも、誰かがフォローしてきたらフォロー返しをする。フォロー数UP互助会である。もちろん、フォロワー数を増やすことだけが目的なので、それ以上は求むべくもない。やはり、業者やアフェリエイト関係が多いのも事実。

このような機械的なフォロワー数の伸びにどれほどの意味があるのかは激しく疑問であるが、普通にやっても全然増えない苦悩を知っているせいか、この伸びが楽しくもある。

ここまで増えたのだから1万フォロワーを目指そうと思う。ときどき感じる。ツイッターをやっている目的がフォロワー数の増加となってやいないかと。フォロワー数の増加はあくまで手段であり目的ではない。しかし、1万人目指す！

ツイッターアカウント

<http://twitter.com/hkazuyukiz>

物というのは単なる道具以上の感情を人に与える。人間は人間を愛したり恋するのと全く同様に、物に対しても恋したり、頼もしく思ったり、癒されたりする。それもそのはずで、感情とは主観であり、主観は自己で醸成するしかなく、その対象は生物に限らない。例えば小説や詩などは物質ですらない。小説や詩や音楽に感動するのは、物質も超越した概念であり、この概念の発露が感情である。

とまあ、前置きはこのくらいにして、この前手に入れたラミーのダイアログ3を語ってみたい。

物事というのは苦労して手に入れた方が主観的価値は高くなるものであるが、これは定価の三分の一ほどで入手。並行輸入品である。同じものなら安い方が良い。ただ、1円！ とかだと有難味がなくなる。ほどよい価格で入手できたので満足しているところである。

ダイアログ3の最大の特徴はペンらしくないところだと思う。ペンというより棒である。そして、キャップがない。ツイスト式の万年筆は珍しい。パイロットからもキャップレスが出ているが、あちらは見るからにペンである。

この万年筆は大柄である。ペンハウスさん情報だと

全長：139mm（収納時）／155mm（使用時）・胴軸径：13.5mm $\phi$ ・重さ：47g

標準的な万年筆であろうモンブランの146は

長さ：約146mm（収納時）/約156mm（筆記時 尻にキャップをさした状態）

最大胴軸径：約13.3mm $\phi$  キャップ径：約15.4mm $\phi$ （クリップを除く）

重さ：約26g

ちなみにキャップレスは（マットブラック）

長さ：約141mm（収納時）/約138mm（筆記時）

最大胴軸径：約13.3mm $\phi$ （クリップを除く）・重さ：約31g

ダイアログ3がもっとも突出している部分は重量である。50グラム近いペンはなかなかないと思う。持ったときのずっしり感が違う。

胴軸径はどれも同じように見えるが、146とキャップレスは最大胴軸径の値である。ダイアログ3はふくらみがないので、13.5mm $\phi$ を持って常に書くことになる。

このペンの握り心地を言うならば、「重くて太い」である。最初は違和感を感じるが、一週間も使っていると逆に心地よくなっていく。万年筆の重さだけで書けるので、このペンになれて軽いボールペンなどを使うと、筆圧が軽くなりすぎ掠れてしまう。

Mニブを買ったのだが、想像以上に太い。海外製品は太いとは知っていたが、ここまで太いとは……。手帖などに使うのはほとんど不可能であるが、会議などで走り書きをするには、逆にこの太さが頼もしい。宛名にも使える。まだ使っていないが。

万年筆の役割は、もちろん書くということがある。それと同時に、掌中に置いて弄ぶ、という大きな役割がある。ダイアログ3はどちらの任務も恙無くこなしてくれる。

【ブログの方には若干の写真を載せてます <http://ameblo.jp/h-kazuyuki/entry-11173533145.html>】

詩は、音楽と違う。絵画とも違う。映画とも違う。詩は小説とも違う。詩は詩であるが、なにが詩であるか問われると微妙な境界線に触れざるを得ない。

前には、異様に長い詩というのにはあり得ないと思っていたが、最近は10万文字くらい詩もOKなのではないかと思い直した。というのも、現代詩を考えれば考えるほど、詩はなんでも有りであり、妙な恣意性で制約をかけるのはよくないと思うようになった。詩を読んだ一人一人が、その作品を詩であるか、詩ではないか評価する、という方法も悪くはないが、それは無駄ではなからうか。また、聖書なども見ようによっては詩ではないか。

結論から言うと、いちいち作品に「詩である・ない」をジャッジすること自体が無意味に思えてきたのだ。

ある意味、この考え方は詩を破壊するものかも知れない。なんでも詩と認めるということは、なんにも詩と認めないということと同じではないか。他のジャンルから分別されてはじめて一つのジャンルが生まれる。そのジャンルを壊すことになりはしないだろうか。逆に詩の可能性を広げることもできる。ジャンルに囚われなければ、作品の新しい携帯が生まれる。

定型詩というのはよく考えたもので、ある一定の形を取るものを詩と呼んだ。実にわかりやすい。俳句や漢詩などはそうだ。しかし、俳句に季語を入れなければならない、などというのは、やっている人たちにとっては作品のハードルを上げるガジェットではあるが、普遍性を欠かないだろうか。普通の人たちにとっては、その17文字に季語が入っているかどうかは作品を味わう上で気にしないだろうし、そもそも、どれが季語だかすら分からないのではないだろうか。

そもそも、詩に普遍性を求める必要があるのか、という大問題は置いておき、仮に普遍性を求めるのであればジャーゴンのようなものを必須要件とするのはいただけない。現代アートはジャーゴンだらけで普遍性を失った。

詩には意味不明な幻想的な詩と、論文のような分析的な詩がある。この二つは全く違う性質を持っているが、ともに詩であり、同じ詩集に併録されていたりする。性質が違うものですら同じ詩と呼ぶのであるから、やはり、長さでは判断できない。

詩の必要最低要件は文字である。これは異論のないところだと思う。以前は極端に短いものは詩と認めるまいと思っていた。例えば、「絆」などと大きな筆で大きな紙に書き付けたものは詩であろうか。おそらく、あれを詩と認識する者は少ないのではないだろうか。あれは書であり、画に近い。あいだみつおの人間だものなどは、書であり詩であるような気がする。

上記のように極端に長かったり、短かったりする場合は、本能で以て詩のあるなしを感じる事ができる。問題は微妙な境界線なのだ。本能の判断が曖昧になる、微妙な作品を詩として読まされたとき、やはり、一度詩というジャンルを取り払って作品と対峙しないと、作品の本質を見失う。

詩というのは玉虫色で、This is 詩というのは、考えれば考えるほどないと思えてきた。世の中のよくできた詩と呼ばれるものも、99.99%詩であったとしても、0.01%どこか詩でないところがあるような気がしてならない。

「詩である・ない」をジャッジすること自体が無意味、などとはざいたものの、無意味であるかも知れないが、なかなかその呪縛から逃れられない。

ちなみにこの記事は詩であるや否や。

.....

ツイッターを始めた。ツイッターでインクや細々した文具などをUPしてます。よかったらのぞいてみてください。

<http://twitter.com/hkazuyukiz>

不思議な歌

不思議な歌をうたっている  
旋律はさだかでないし  
拍はどこにあるのかわからない  
言葉は愛や歓喜や平和が踊っているが  
しらべは破滅を奏でている  
不思議な歌を  
わたしもうたっている

忙しい

あの電車に乗りたい  
コーヒーも飲みたい  
ギリギリだ

コーヒーをいれた  
こりや間に合わない  
氷でも入れてしまおうか  
そんなコーヒー飲みたくない

ブログにはツイッターで紹介した文具を使って手書きした写真も載せてます。

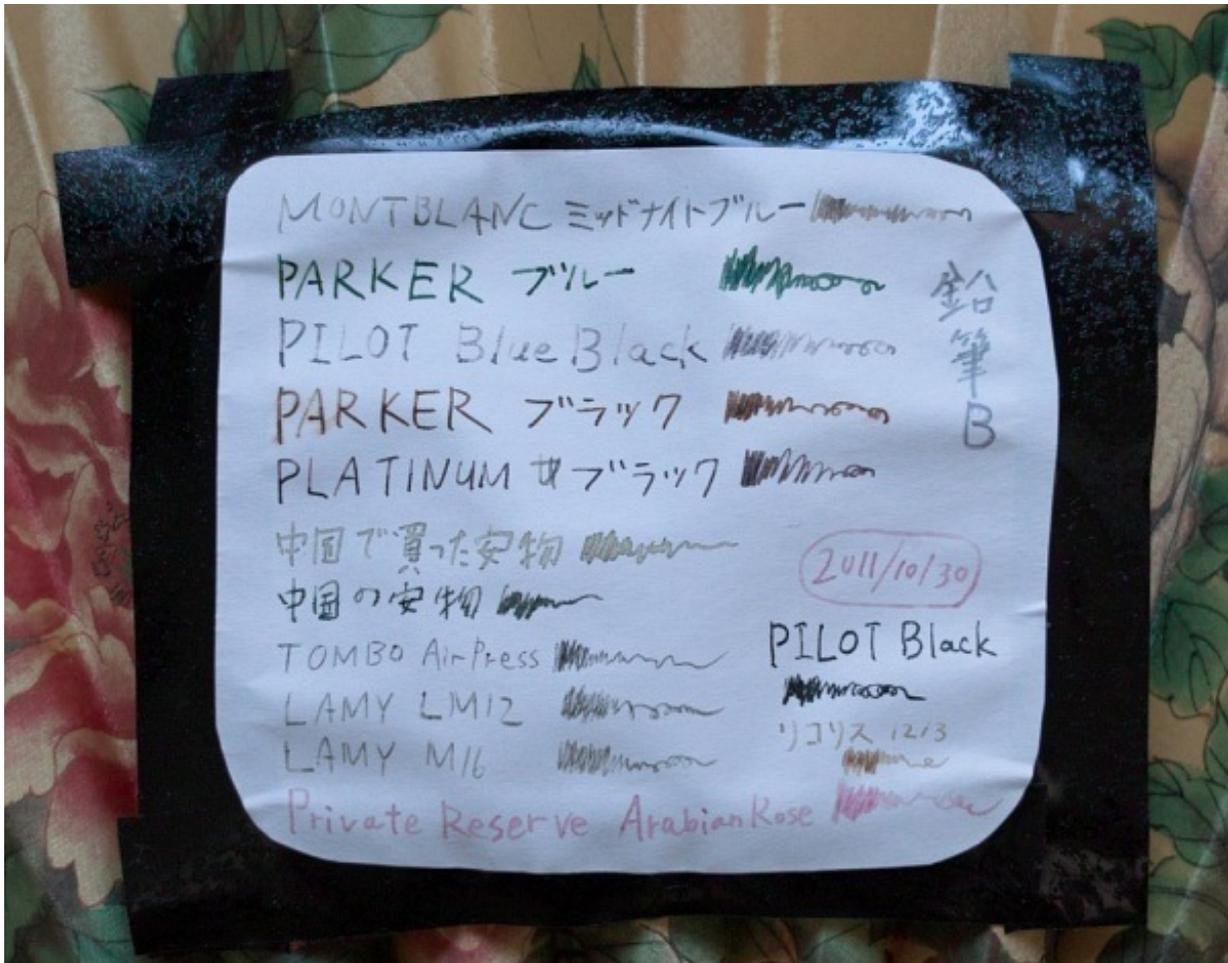
<http://ameblo.jp/h-kazuyuki>

## インク退色テスト。窓に貼り付けて3ヶ月

2階のベランダの窓に貼り付けて3ヶ月。インクの退色具合の追加報告。  
退色テスト1ヶ月時点の退色報告はこちら。写真有り。

<http://ameblo.jp/h-kazuyuki/entry-11101402388.html>

まずは上記のリンクの写真と比べてみて欲しい。撮影は2月2日。貼り付けて3ヶ月の状況。



紙はMIDORIの北国シロクマノート。紙はほとんど焼けていない。

以下は個人的感想。

### ■モンブラン ミッドナイトブルー

青みは完全になくなった。灰色になった。

### ■パーカー ブルー

これはブルーブラックの間違いか？ 1ヶ月時点と同じ緑色のままであるが、今回は緑が薄くなった感じ。

#### ■パイロット ブルーブラック

こちらも、青みがきえて、1ヶ月時点より薄くなった。かなり掠れてきている。

#### ■パーカー ブラック

茶色に変色した。1ヶ月時点よりも若干薄くなった。

#### ■プラチナ ブラック

1ヶ月時点ではほとんど退色は見られなかったが、今回の3ヶ月時点では確実に薄くなっている。

#### ■中国で買った安物M

1ヶ月時点で最も変化が大きく、変色したものであるが、今回はさらに薄くなっている。

#### ■中国で買った安物F

退色は若干あるがはっきりと色は出ている。

#### ■トンボ エアプレス

1ヶ月時点ではほとんど退色のなかったボールペンであるが、今回の3ヶ月時点では確実に退色が見られる。

#### ■ラミーLM12&LM16

トンボよりもさらに退色が見られる

#### ■プライベートリザーブ アラビアンローズ

かなり薄くなった。もはやピンクである。

#### ■パイロット ブラック

ほとんど退色なし。

#### ■鉛筆

退色なし

このテストとはべつに、最近、青色系のインクが増えたので、それらをまとめてみた。今回は実験用と保存用に二つ用意した。今回は日光にあてるようなことはせず、部屋の壁に貼り付ける。一方は暗所に保管する。どのくらいの退色が起こるのか楽しみである。

ツイッターを始めた。ツイッターでインクや細々した文具などをUPしてます。よかったらのぞいてみてください。

<http://twitter.com/hkazuyukiz>

## 伝説的ハヤシライスを食べた

---

本や文房具や東京が好きなので、丸善に元祖ハヤシライスを名のるものがあるのは知っていたが、食べたことはなかった。僕は普段、一人の時は外で食事をしないので、食おうと思って出かけなければ食うことはない。友達を誘って食いに行った。

ハヤシライスの名前の由来は諸説あるのだが、その中で早矢仕有的が考案したというのがある。早矢仕有的というのは丸善の創業者である。日本橋丸善の3階はカフェが併設されていて、そこで食えるようになっている。

もちろん、オリジナルハヤシライスを注文。大きな皿の片隅に、ラグビーボール型をしたライスが盛られ、皿全体にハヤシソースがかけられている。大盛りは+150円で、ライスが二段重ねになったものだ。最近の大盛りは、怪獣が食べるのかというような狂った分量が出てくるご時世なのでちゃんと確認した。ルーはギリギリ足りた。

僕はハヤシライスが好きで、学生時代には毎日レトルトハヤシを食べていた時期もあった。オリジナルハヤシライスの味はというと、最高に美味しいレトルトハヤシを更に磨き上げて美味しく感じた。元祖ハヤシライスだからといって、なにか特別な味がするわけではなく、予備知識なしでこのハヤシを食ったら、きっとみんな「美味しいハヤシライスだね」となんら疑念を抱かずに言うはずである。きわめてオーソドクスな味なのだ。しかし、なればこそ好感が持てたのも事実である。最近のラーメンではないが、あれこれ付け足したり変な味にしたりして、オリジナルティーを出すのが流行っている。もはやラーメンではなくなっている。普通のラーメンで、かつ、これぞラーメンと呼べるようなものは少ない。丸善のハヤシライスは、普通のハヤシライスであり、かつ、これぞハヤシライスなハヤシライスなのである。

## インクはついに実より名をとった

---

万年筆にはまった人は、おそらくインクにもはまる。というのも、お気に入りのペンに、お気に入りのインクを入れて、お気に入りの紙に文字を記すのが、デジタル時代の前時代的文化的意義であるからである。

ペンが実用からかけ離れば、当然インクも実用からかけ離れ、より優雅な文化となる。ご存知の通り、貴族文化とは実用性を度外視したものなのだ。ファッションすなわち我慢なり、という言葉が示すとおり、実を捨てて名を取る文化である。

そこで、最近ではインクがまさに「名」を取っている。実用性インクならば、「青」とか「赤」とか記した方がよほどわかりやすいが、それでは面白くない。パイロットの色彩雫（ちなみにこれはイロシズクと読む、否、読ませるのである）を例に取るならば、同じ青でも、朝顔、紫陽花、露草、紺碧と微妙に違う青がそろそろ。どこにも「青」という色を示す文字は出てこない。赤ならば、冬柿、紅葉、躑躅など。他にも、冬将軍、孔雀などという色がある。これらが、何色が想像が付くであろうか。しかし、実際に使ってみたいと思わせるネーミングではなかろうか。海外のインクメーカーであるドクターヤンセンなどはもっと露骨で、色に過去の偉人の名前を付けている。ナポレオン、マルクス、バッハ、ショパン、アンデルセン、etc.....。色が想像できるだろうか。ちなみに、マルクスはピンク色だ。

色彩雫は欲しいなあ、特に孔雀が、と思っていたが、以前ブログに書いたように、色彩雫は高い部類に入る。そう易々といくつも買えるものではない。そこで、リミテッドエディションというのが発売されていた。AからDまで、それぞれ3種類の色が入っている。が、もうどこも売り切れているらしい。このまえたまたま最後の一つ、というのを見つけたので買った。壺は小さく一色20mlである。僕が買ったBセットには紺碧、新緑、霧雨が入っていた。新緑は欲しい色だった。他の2色も面白い。紺碧は初恋と比べて若干薄く、これはこれで使い道がある。霧雨はまだ開けていない。試し書きしたらツイッターにでも画像をアップする。この色彩雫、20ml×3本=60mlで3150円だから、1mlあたり52.5円とチャートの上位に食い込んだ。

### インク値段チャート

<http://ameblo.jp/h-kazuyuki/entry-11127079285.html>

ツイッターを始めた。ツイッターでインクや細々した文具などをUPしてます。よかったらのぞいてみてください。

<http://twitter.com/hkazuyukiz>

## ノスタルジー カメラは写真以外を記録するか

---

古道具屋をのぞくのが好きである。その日もなにげなく大手古道具屋チェーン店に入った。最近ではカメラの部品を探している。娘が生まれたのでちょっといい一眼レフを買った。

しかし、最新のカメラも、根本的な機能は数十年前と代わらない。銀塩カメラとデジタルカメラの違いは、フィルムがイメージセンサーに取って代わっただけである。だから、カメラでもっとも大事な部品は太古の昔からレンズと決まっている。その証拠に、最新のデジタル一眼に数十年前のレンズをそのまま付けることが可能なのだ。古いレンズはカメラ屋でも売っているが、いいものを格安で買おうと思ったら古道具屋に限るという次第だ。性能？ 昔のレンズは悪くない。むしろ情感がある。だから、今日のように古道具屋をのぞいては古いレンズを探している。

その店に面白いレンズはなかったが、カメラ用品が無造作に放り込まれているカゴを漁っていると、ふと手が、目が、懐かしさを感じた。昔の8ミリビデオカメラである。ところどころすれたり、カビが生えたりしていた。そのカメラは寸分たがわず僕がこどものころサンタクロースからもらったものと同じモデルであった。断言できる。僕が使っていた機種に相違ない。それほど、どこに何のボタンが付いているか知っていた。手にすればするほど、思い出が押し寄せてきて僕の頭を占領する。ファインダーは光学ではないから何も映らない。この時代から電子ファインダーはあったのだ。モノクロであったが。

このズームレバーで父親のデブな腹をアップで撮ったり、ファインダーを縦にして地面の人形を映した。祖母とたわいのない人形映画を一本撮ったっけ。雪山のウサギをさがしたり、家にきた友達を撮ったり、いろいろなことをした。

僕のこのカメラは今どこにあるのだろう。実家のどこかに眠っているのか。20年ぶりくらいに、このビデオカメラを手にして、しまっていた記憶が一瞬で溢れた。どれもしょうもない思い出である。

カメラはテープにだけ過去を記録するのではなく、カメラそれ自体にも記録していたらいい。僕が今使っているちょっといい一眼レフカメラに、娘は僕を記録してくれるだろうか。

## 万年筆用インク、1ミリリットルあたりの値段、各メーカー一覧

---

あけましておめでとうございます。新年とか誕生日というのはサッとやってきて、サッと去っていき、また来ます。本来直線である時間の流れを無理くり円形にしています。農耕が主体だった時代ならば、季節の巡りに区切りをつけるのは合理的ですが、いまやそういう時代ではない気がします。2011年の365日目の次は、2011年の366日目でもいいではないか。などと、毎年思っています。月や週もそう。この不可解な区切りに、急かされ、諦め、ため息をつく。大切な時間が浪費されてしまっているのではないのでしょうか。「週がなくなったらこのブログはいつ更新されるのだ？」心配はご無用。7日おき更新にします。いやしかし、一日という区切り、一秒という区切りすらなくなってしまったら.....

そんなこんなで、今年もよろしくお祈いします。今年は何のあるものを残そうと思っています。

形あるもの第一弾。趣味の文具箱Vol.21で特集されていたインク。このインクの値段を容量で割って、1ミリリットルあたりのインクの値段を一覧にしてみた。レギュラーインクでこれほど差があるとは.....。パイロットの30mlと70mlの逆転は意外だが、総じて国内勢は安い。

テキストで貼ってみた。環境によっては読めないかも知れないので、JPGも一応載せておく。インク選びの一助となれば幸い。

### 1ミリリットルあたりの値段が高い順

メーカー      価格      容量ml      1mlあたりの価格（円）

Caran d'ache	2,625	30	87.50
Jansen	2,100	30	70.00
Visconti	2,625	40	65.63
Delta	1,890	30	63.00
Montegrappa	2,415	42	57.50
S.T.Dupont	2,415	42	57.50
Marlen	1,680	30	56.00
Yard.O.Led	1,575	28.4	55.46
Pelikan Edelstein	2,415	50	48.30
Conway Stewart	1,260	30	42.00
Sailor ナノインク	2,100	50	42.00

ご当地インク	2,100	50	42.00
Herbin	1,260	30	42.00
Private Reserve	1,890	50	37.80
Pelikan 蛍光イエロー	1,050	30	35.00
cartier	2,100	60	35.00
Faber-Castell	2,100	62.5	33.60
Montblanc	1,890	60	31.50
神戸ink物語	1,575	50	31.50
Pilot 色彩雫	1,575	50	31.50
Stipula	2,100	70	30.00
Aurora	1,260	45	28.00
Platinum カーボン	1,575	60	26.25
Rohrer&Klingner	1,300	50	26.00
Waterman	1,260	50	25.20
Lamy	1,155	50	23.10
Platinum ミックス	1,260	60	21.00
Sailor	1,050	50	21.00
Sheaffer	1,050	50	21.00
Cross	945	62.5	15.12
Pilot 70ml	1,050	70	15.00
Parker	840	57	14.74
Pilot 30ml	420	30	14.00
Platinum	420	30	14.00

### メーカー順

メーカー	価格	容量ml	1mlあたりの価格 (円)
Aurora	1,260	45	28.00
Caran d'ache	2,625	30	87.50
cartier	2,100	60	35.00
Conway stewart	1,260	30	42.00
Cross	945	62.5	15.12
Delta	1,890	30	63.00
Faber-Castell	2,100	62.5	33.60

Herbin	1,260	30	42.00
Jansen	2,100	30	70.00
Lamy	1,155	50	23.10
Marlen	1,680	30	56.00
Montblanc	1,890	60	31.50
Montegrappa	2,415	42	57.50
Parker	840	57	14.74
Pelikan	840	62.5	13.44
Pelikan Edelstein	2,415	50	48.30
Pelikan 蛍光イエロー	1,050	30	35.00
Pilot 30ml	420	30	14.00
Pilot 350ml	1,575	350	4.50
Pilot 70ml	1,050	70	15.00
Pilot 色彩雫	1,575	50	31.50
Platinum	420	30	14.00
Platinum カーボン	1,575	60	26.25
Platinum ミックス	1,260	60	21.00
Private Reserve	1,890	50	37.80
Rohrer&Klingner	1,300	50	26.00
S.T.Dupont	2,415	42	57.50
Sailor	1,050	50	21.00
Sailor ナノインク	2,100	50	42.00
Sheaffer	1,050	50	21.00
Stipula	2,100	70	30.00
Visconti	2,625	40	65.63
Waterman	1,260	50	25.20
Yard.O.Led	1,575	28.4	55.46
神戸ink物語	1,575	50	31.50
ご当地インク	2,100	50	42.00

万年筆とフィルムカメラは面倒くささを見直す良い機会になった。近年、デジタルの発達とともに、便利さ、快適さを求める中で、面倒くささの中にあつた楽しみや喜びが去っていった。自分もずっと、便利さや合理性を求めて身の回りのものを揃えてきた。その考え方を見直すきっかけになったのは、オイゲン・ヘリゲルの日本の弓術を読んでからだ。

日本の弓術には以下のような意味のことが書かれていた。

「弓術は戦争で敵を倒すために使われていた。明治以降、戦争で使用するという実用的意義がなくなったにも関わらず、弓術はますます盛んになった。弓術は実用性という相対性を失うことによって、本来の内在する精神がより明らかになった」

この論理を借用して万年筆と手書きに当てはめるとこうなる。

「文字を書いて言葉を残す行為は、以前は手で書く以外に出来なかった。しかし、近年PCの普及とともに、誰でも、手書きよりも明瞭で嵩もとらず楽で早い活字、を利用することが出来るようになった。手書きやペンは実用的でないが故に、敢えてそれを行うことに、なんらかの精神的意義があるはずであり、それが求められる」

毛筆にまでさかのぼってみた。出来合墨汁を買わずに墨と硯で墨汁をつくって書いたりもしてみた。そこには、上記の理論のPC→ペンを毛筆→ペンに読み替えるくらいの精神的何かがあるのだが、あまりに大変でよほどまとまった時間がないと出来ない。今回は手書きだけにこだわる。

では、手書きの精神的意義とは何かを考えてみたい。

僕は神も仏も信じないが宗教は好きである。宗教は人間が考え出したもっとも崇高な屁理屈である。弓術や手書きを軽くすっ飛ばすくらい、純粹に精神的意義に特化したものだ。その話は置いて、写経という行為がある。趣味の文具箱Vol.20に載っている「書くを愉しむ8つのアイディア」の中の一つにも数えられている。写経はただ書き写せばいいというわけではない。ワープロ検定とは違うのである。一字一仏といって、一文字一文字、仏を思って書くのである。写経をすると字が上手になるとか、大願成就するとかいうのは卑俗な考えである。写経の目的はまさに、書くという行為を通じて体現する精神的何かなのである。

中国では書画同一といって、書は画と解される。外国でもカリグラフィーというものがある。これは、文字が視覚的に何かを訴えるよい例である。PCでも様々なフォントがあるのは、文字の視覚効果を狙ったことだ。そこに、手書きという選択肢は含まれてしかるべきだと思う。谷川俊太郎と大岡信の対談で、朗読の功罪のようなことが語られていた。本来読者が無限に想像するは

ずの言葉が、朗読することにより一義的な意味になってしまうというのだ。確かに、平和を歌った詩なのに、怒ったように読んだら、なんか意味が変わってしまう。だが、上手に読めばより詩の意味が伝わるという可能性もあるという。手書きもそんなところではないだろうか。ある本では、野口英世の母の手紙というのを、名筆として取り上げていた。

あと、筆順と形にこだわる必要はない。正しい筆順、書き順、というのは文字にはない。便宜上文部省がつくったものだ。ただ、王羲之のように書きたいなら、王羲之の筆順で書いた方が良く、丸文字を書きたいならそれに適した筆順で書くしかない。

文字に上手い下手もなかるう。自分も他人も読めないような文字というのは、模様として書くならいいが、ちょっと文字の範疇から逸脱している。そうでないなら、綺麗汚いもない。明朝体とゴシック体、どちらが上手な文字であるかを論じるようなものである。

ただ、例外がある。僕の字は汚くて下手い。字が下手なので、行書や草書でグニャグニャと書けばそれらしく見えるかと思って取り組んだら、余計酷くなった。その代わりに、日記をその辺に放っておいても平気だ。だれも読めないから。最近はyoutubeとかを見て、綺麗な字を練習している。パイロットのペン習字でもやろうかと考えている。現在修行中。こんな感じだ。万年筆という詩を書いた。

## 万年筆

すらすら書いて

思ったように言葉が出てくる

思ってもみない言葉が出てくる

インクは宇宙

言葉が遊ぶ

インクとの宇宙は

筆によって変わる

紙によって変わる

感情によっても変わる

無限との対話

この文字をみよ！

活字だけなんてもったいないではないか

このペンをみよ！ この色をみよ！

はっきり言ってジョッターはかなり使える。が、落とした。

---

ジョッターを落とした。一緒にペンもなくした。なので、また買った。ミニペンも買った。ちなみに、ペン一本でジョッターを四つ買える。ジョッターは百均で売っている。

以前に紹介したジョッターだが、想像以上に使える。どのくらい使えるかというと、落としてなくしてしまうくらい毎日持ち歩いている。

ジョッターはあまり普及していない。いや、全然普及していない。使っている人を見たことがない。使ったことがない人はぜひ使ってみて欲しい。ミニペンと揃えても500円なのだ。とくに、ひらめきを失った苦い経験がある人は持つべきだ。

普通のメモは「ポケットから出して開く」最悪なケースだと、「鞆から出して開いてペンもどこかから出す」

この動作がいらぬのだ。ポケットから出した瞬間にかける。

ジョッターの意味はなんだろうとちょっと調べてみた。英語だとjotterである。メモ帳、メモパッドという意味。そのまんま。jotには動詞と名詞があり、動詞は「短いメモをとること」とある。名詞は「微少、わずか」などという意味。jotの語源はギリシャ語の「ι」iotaである。英語のiotaとjotは同じ意味。ιは物理学では微少を現すらしい。

ジョッターメモを讃え詩を作った。

## メモ

宙を舞う言葉を仕留める銃  
一瞬を永遠に変える  
早さと正確さを要するが

心の中を照らし己の謎を探し出す懐中電灯  
闇に色を塗っていく  
上手く光をあてられるだろうか

人を動かすもの  
思いを伝えるもの  
他人と己をつなぐもの

それは記憶  
もう一つの心  
いつかの心

A5のノートと比べてこの大きさだ。ちなみに上記の詩くらいなら全部書ける。リフィルは無印のコットンペーパーが使える。落としても良いように二つ買って来た。



## 万年筆のインクの退色テスト

---

万年筆という筆記具を使っているであろうか？ 日常使っているひとは少ないのではあるまいか。毛筆ならば学生の時分に授業でやらされるが、万年筆はやろうと思わなければやらない。僕もついこの前まで、さわったことはあったが、使うことはなかった。しかし、ちょっといい万年筆をもったら、これが嬉しくてたまらず、以来、日常の筆記に万年筆を用いている。書かなくてもよいことまで、わざわざ紙に書いている。今までは、なにかを書きたいからペンを使うのだと思っていた。最近では、ペンを使いたいがためになにかを書いている。万年筆を使いたいが故に作家になったひとは絶対にいると思う。

たいしてインクを持っているわけではないが、退色テストをしているので、中間発表をしてみたいと思う。

一番下の画像は、2011年10月30日に書いて、翌日撮影したものと、それを、2階ベランダの窓ガラスに約1ヶ月貼り付けたもの。撮影は同年12月3日。窓ガラスは磨りガラス。夜は雨戸を閉める。

紙はMIDORIの北国シロクマノート。紙はほとんど焼けていない。

思ったより退色したものとそうでないものがあった。写真も参考になるかも知れないが、自分も一つ一つ感想を書いてみた。ただ、テストと同じものをもう一つ作っておけば良かった。後悔先に立たず。

モンブラン ミッドナイトブルー

純粹に薄くなった。青味はほとんど消えている。古典ブルーブラックとのことだから、青味が抜けるのは情報通りといったところか。この後のどうなるか楽しみである。

パーカー ブルー

最初から結構複雑な色をしていると思ったが、もう完全に緑色になっている。緑が浮かび上がってきたという感じだ。インクの濃い部分は黒くなっていて退色はない。

パイロット ブルーブラック

こちら、モンブランほどではないが青味が抜けている。しかし、ほとんど変化ないのではないだろうか。

パーカー ブラック

こちらは茶色に変化した。なかなか面白い色になったが、このまま消えていってしまわないか心配。

プラチナ ブラック

心なしか薄くなった感はあるものの、ほとんど変わらず。

## 中国で買った安物M

ペリカンのパクリ（売人はそういていたが、どう見てもペリカンに見えない）らしいが、最初からインクが入っていた。飛行機の中でも爆発せず、無事に持って帰ってこられた。FとMを買った。両方とも最初からカートリッジインクが半分ほど入っていた。色は違うらしい。

今回のテストで一番色が変わったのは、このMである。ほとんど灰色に変化。一番最初に消えそうだ。

## 中国で買った安物F

ちなみにどのくらい安かったかという。2本で500円くらい。……プレピーが買えるではないか。よくよく思い返すと、それほど安くもないかも。

こちらは退色はほとんどない。むしろ、黒が強くなったきらいがある。

## トンボ エアプレス

500円くらいの実用的なボールペン。高いボールペンの書き始めが掠れるのに対し、エアプレスは最初からしっかりかける。退色はほとんどない。

## ラミーLM12&LM16

中身は同じなのだろう。若干の退色が見られる。油性ボールペンでも退色するようだ。

## プライベートリザーブ アラビアンローズ

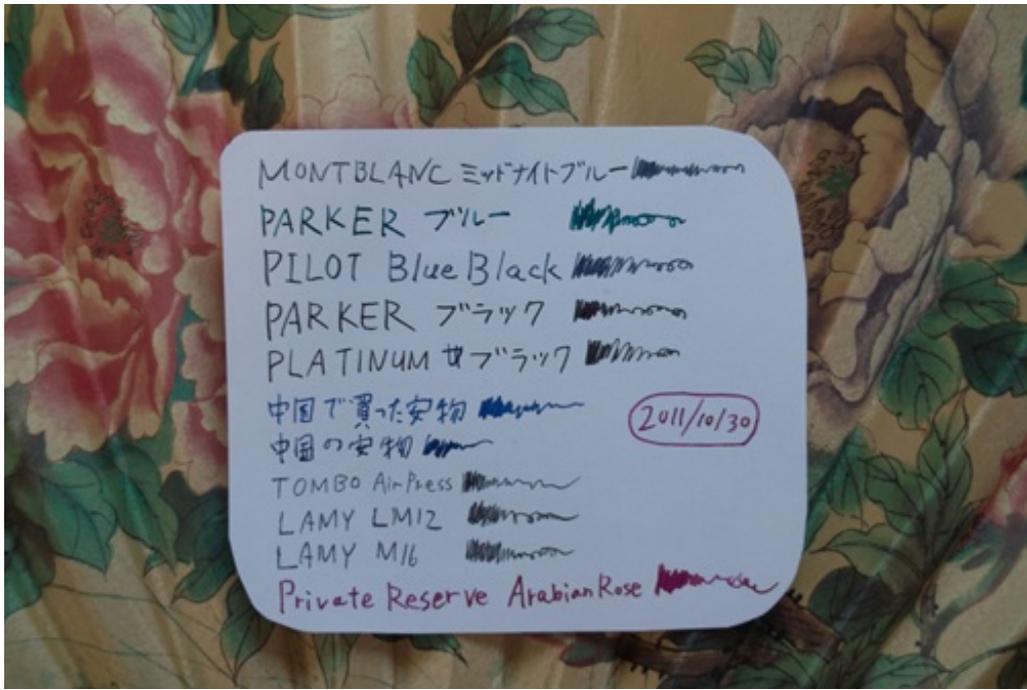
そのまま薄くなった感じだ。しかし、ほんのちょっとである。

## パイロット ブラック

これは後から付け足したものであるが、ほとんど退色なし。

また窓ガラスに貼り付けたので、しばらくしたら再度報告する。

10月31日撮影



12月3日撮影



## アルファロメオの不思議

---

ネットで名前とか住所とかを登録して、アルファロメオの店にいくと、Amazonの1000円券がもらえるという企画が先々月あった。ネットに登録したあと実店舗に行かなければならない。どこにあるのだろうと場所を調べてみたら、なんと家のそばの外車が並んでいる店がアルファロメオの店だった。で、登録して行ってみると、夕飯時だからか人がいない。車屋なので車を展示する関係上ショールームはだだっ広い。カウンターの奥で店員が一人、椅子に座っていた。はやらないラーメン屋の匂いがした。しかし、並んでいるのは高級外車。僕は戸惑う。仕方がないので、すみません、と呼んで登録情報をプリントアウトしたものを渡した。中年で茶髪の、いかにも外車ディーラーでござんすといったような店員は、「あ、はい」と書類を持ってカウンターの奥に下がった。車は嫁が嫁入り道具として持ってきた13万キロ走っている軽自動車しか持っていない。が、車は基本的に好きなので高級外車を眺めていた。ドアの開閉もした。運転席に座る気にはならなかった。虚しいだけだ。僕と店員だけの店内には軽妙なジャズが流れていた。けっして大きくない音量のジャズが鮮明に聞こえていた。五分ぐらいしても、店員は何も言ってこない。もう帰っていいのか知らん……。カウンターの奥のコピー機が唐突に稼働し始めた。店員は一枚のA4紙を持ってきた。「これに記入して下さい」項目はネットで書いたのと全く同じ問いだ。なぜ同じものを二枚書かせるのかわからない。文句を言っても仕方がない。書いて渡すと、「では、登録しておきます。後ほどメールアドレスのほうに商品券を送ります」と言って再びカウンターの奥に下がった。Amazon券をばらまいて店に行かせるくらいだから、さぞかし売り込まれるのだろうと思いきや、予想はあっさり覆る。そう、美味いと聞いて行ってみたら全く流行ってないラーメン屋だったくらいの手痛い裏切り。これが海外風の接客方法なのだろうか。それとも、店員は一瞬で僕が客になり得ないことを見抜いたのだろうか。せっかく着ていった一張羅のポールミスは功をなさなかった。そんなアルファロメオに違和感を抱いて一月ほどたったある日、商品券が送られてきた。早速買い物。アルファロメオの券で買った感はほとぼしる。そう、アルファロメオは僕の中で他の外車メーカーとは違う位置になった。これが、日常的に誰でも接するユニクロとかマクドナルドとかなら話しは別だ。普通は外車になど縁がない。そんな消費者と縁を紡ぐ意味合いで、アルファロメオは上手いことをやったのではないか。

自分は電子書籍をやってみた。詳細はこちらをご覧ください。

<http://ameblo.jp/h-kazuyuki/entry-11038764637.html>

だから、電子書籍には興味があるし注目もしている。にも関わらず、電子書籍が売れたという話はほとんど聞かない。唯一の成功事例は携帯小説くらいではなからうか。もしくは、電子辞書である。

しかし、いずれ電子書籍が流行りそうな気がするのには、身の回りにデジタル機器が増えているからか。これも、iphoneとBluetoothキーボードで書いている。掲載先はブログである。デジタルである。自分の作品が上梓されて流通するというのは考えにくいし、ハードルは高い。個人的に電子書籍が流行ると思うのはかくのごとくルサンチマン心情を有しているからとも思わなくもない。

判断を迷わすものに、紙の本は売れないのに、オフィスで使用するOA紙の量は減らないという、相矛盾する情報がある。娯楽の文字はモニターでよく、仕事の文字は印字でなければいけないのだろうか。確かに会議では紙を配る。連絡はいまだにFAXである。しかし、これはタイムラグの問題だと思う。最近ではプロジェクターで済ます会議や、徐々にではあるがメール返信も増えている。利便性からいえば、ITを利用しない手はないのである。

間違いないのは、手書きは相当減ったということだ。最近ではメモですらノートパソコンを用いるものが増えている。そして、万年筆が復権をとげてきている。江戸時代、鉄砲よりも名刀が重宝されたのと同じような理由だ。

電子書籍について、上記から結論を導けば、時間はかかれども電子書籍が紙の本に取って代わることは歴史の必然ということになる。ただ、ここで言われているように、電子書籍が革命的知の転換になるかは疑問である。少なくとも、いまの知的活動を延長する形で紙にとって変わるのには確かだろう。これは知の転換にせよ、といている。

印刷は手間である。デジタルで書き、最終消費までデジタルで完結できれば楽だ。今はまだそのシステムが完成していない。こんなことを思うのも、先週の文学フリマで使った金額が、僕の人生において費やしてきた電子書籍にかけた費用の数倍だったということだ。電子書籍は本当に買いにくい。システム的に買うのが面倒くさいというのではなく、気持ちが電子書籍に金を払うのを躊躇させる。おなじ100円でも古本と電子書籍では支払うマインドがまるで違う。これは、コンテンツの責任ではないが、電子書籍がクリアしなければならない一つの大問題だ。

## こうやってスマホ用の電子書籍を作ってみた

---

forknとパブーにアップした。

パブーはブログの投稿のようにテキストをコピペするだけ。

forknはPDFのインポート機能が付いている（パブーも有料版だと付いている）。だから、まるまる一冊PDFにして、電子書籍のようにしてみた。

アジサイ少年という作品である。

パブー=<http://p.booklog.jp/users/hkazuyuki>

forkn=<http://forkn.jp/user/hkazuyuki/>

以下が手順。

表紙はフォスターというiPhoneアプリで制作。簡単だが、自由度が低いのでおすすめはランクは「中」程度である。外国では電子書籍の表紙づくりに活用されている、という情報だったので使ってみた。有料アプリである。

できあがった表紙は画像ソフトで開いてPDF出力する。PDFにする方法は、CutePDF Writerなどのソフトをインストールし、仮想プリントアウトをするだけ。あっという間にPDFファイルができあがる。便利な世の中になった。CubePDFというソフトを前は使っていて、問題なくできていたのだが、新しいPCにしたら突然使えなくなってしまったので上記のに変えた。前のPCではこちらを使っている。

小説本文は一太郎で書いている。一太郎でレイアウトしてやはり同じようにCutePDF WriterでPDF出力する。奥付も同じである。

そして、今三つ作ったPDFをPDForsell2というPDF結合ソフトをつかって結合する。こうして作ったのがforknにUPしたものである。一太郎以外はすべてフリーソフトである。ワードは持ってないから分からないが、多分出来ると思う。文章のレイアウトが出来るソフトならば、なんでもPDF化は可能である。

あとはこのPDFをforknのPDFインポートでアップロードするだけ。

iPhoneはOS5になってからか、PDFファイルが普通に読めるようになった。以前はgoodreaderとかいろいろ使って読んでいたが、ブラウザで直接forknを開いてダウンロードすれば良いだけである。

forknにアップしたものはiPhoneやスマホで読みやすいように組んだ。Sidebooksというアプリで読むとなお読みやすい。このときページ方向を左→右に設定する。ワンタッチで出来る。

## 書くことの魅力 小説について

---

かれこれ10年以上小説を書いている。昔はよく読んだが、最近はあまり小説は読まない。せいぜい読んでもひと月に一冊、読まない時は2、3ヶ月読まないこともある。ちなみに今読んでいるのは吉川英治の資本太平記。三国志、宮本武蔵と読んできたが、資本太平記はちょっと趣が異なるような気がする。人物中心の物語の進め具合は吉川英治っぽいと言えはばよいのだが。

時々、読まないのに書くのは邪道のようなことを言われるが、小説に王道も邪道もあるものかと思う。というのも、書くことと読むことはまったく違うことだからだ。それに、書くことの条件が読むことだとしたら、この世に読物は誕生しないはずではないか。誰かが何かを書かなければ、誰も何も読めないのだから。

読むことの魅力は本を読む人間なら誰でも知っている。書くことの魅力とはなんだろうか。ことに、小説を書くことの魅力とは。ぼくは頭のモヤモヤをすっきりさせることではないかと思う。なら、論文やエッセイの方が向いているという人もいるかもしれない。だが、小説も頭の整理にはうってつけだ。この世の狂い具合を、哲学や社会学的な論調で書くのも有意義だが、もっと飛躍させて空想の世界に放り込むのも楽しい。詩やアフォリズム、映画や音楽などの創作も同じような側面を少なからずもっている。ただ美しいものを生みたいという理由のみで創作はしない。頭の中にまとわりつくモヤモヤの正体を突き止めたいと思ってのことも、少なからずあるはずだ。

ブログやmixiなどで、何かを書いている人は多い。小説を書いてみることをおすすめしたい。全くの空想の物語をつくる快感は日記や論文等の文学では得られぬものがある。

## amazonが日本に参入

---

ついにamazonが日本の電子書籍に参入してくるという。amazonが参入したからといって鳴かず飛ばずの日本の電子書籍市場が活性化するかといえば疑問である。日本の電子書籍はフォーマットがバラバラで使い勝手が悪いから普及しない、というが、それほど使い勝手が悪いだろうか？  
そうは思わない。使おうと思えば簡単に使える。

普及しない理由の一つとして値段があげられると思う。電子書籍は決して安くない。APPストアでモシドラは800円、そのほか紙書籍が電子化されたものは大体350円。一番安くても85円。ベストセラーなどはしばらくすると山のように古本屋に並ぶ。amazonがいくら頑張っても、古本より安くない限りその他のプラットフォームと同じ運命ではないか。海外の古本事情は知らないが、日本の人口密度は古本に打って付けだと思う。

価格問題で、古本の問題よりもよりやっかいなのは、本はそもそも高いのか、という命題だ。専門書はともかくとして、ちょっと大きな本屋で手にはいるような単行本や新書、文庫、などはそれほど高くないだろう。これらが高いのであれば、携帯の料金や通信料、専用端末などは超高額商品である。

そうなると、電子書籍が価格で戦うのは無理になってしまう（タダとか、10円とかなら勝機はあるかも知れないが）。戦うには、読みやすさ、かさばらなさ、動画を入れるとか、webにリンクするなど、紙では物理的に不可能なことに挑戦するしかない。ただ、出版社が歯牙にもかけぬぼくのような個人物書きには電子書籍は素晴らしい可能性だ。

結論として、amazon参入はそれほど大げさに考えることではない。この国の出版事情、電子書籍事情が大きく変わるものとも思えない。今年は電子書籍元年などといわれていた。電子書籍元年はどうも来年以降に持ち越された感がある。

木曜頃更新しようと思っているのだが、次の木曜は出かけていて更新できないので今日しました。